

恩師 澤良木庄一先生を偲んで

細川 公子

1月17日、澤良木先生最期のお顔を拝し、ご冥福を念じながらお見送りを済ませて帰宅しました。家に戻ると寂しさが増し、清水高校の卒業アルバムを開けたら、立派な体格でイケメンの澤良木先生を見つけました。数時間前のお顔が浮かび、半世紀以上の時の流れを痛感しながら、ほとんど忘れ去った記憶を辿ってみました。アルバムのクラブ紹介で私は生物部と書道部に写っていました。書道部？ああ、そうやった！そこそこ活動していたはずなのに、全く覚えていませんでした。一方の清水高校生物部での活動の日々は毎日がとても楽しく、部活動のために高校に通っていたように思います。私の人生で最も充実していたころかもしれません。団塊世代の私が在籍していたときの清水高校は、1学年6クラス、生徒数270人と生徒であふれていました。クラブ活動が非常に活発で、生物部は熱心な先生の指導の下、「足摺地方の自然研究」をテーマに毎年4～5題の研究発表を行っていました。シダに関する研究は山岡和興先生、植生調査は澤良木先生に指導を受け、頑張った成果として1966年度高知県児童生徒文化賞も受賞できました。放課後は植物標本作りで新聞紙の交換や、顕微鏡を使ってシダの前葉体のスケッチなど、クラブ、クラブの毎日でした。月1回は白皇山や今ノ山に植物採集や植生調査に出かけていました。10メートル四方のコドラートを張り、「高木層はアカガシ、〇〇メートル・・・」澤良木先生の指導で男子部員が中心になって調査を行いました。また、年に一度の発表に、会場である高知市への遠征も一苦勞でした。鉄道は土佐佐賀までしか通ってなく、土佐清水はまさに陸の孤島でした。遠征の交通手段は足摺汽船の利用しか設定されないため、大荒れの海に大酔いの辛い長い船旅でした。

高校卒業後は、先生と直接お会いすることは少なかったのですが、植物を通じて何かと気にかけて頂きました。先生が自然保護関係の県の委員を辞退される時、実力も実績もない私を後任に推薦して下さったのは、先生から「頑張ってヤレよ！」のメッセージだったと思います。

一番充実していた時期でありながら、何せ、半世紀以上前のこと、殆ど忘れ去り、いつ？どこ？全然思い出せないのですが、生物部のフィールド調査で、「ここ行くがー？」すごい背丈の高いススキやバラが茂るブッシュの藪漕ぎを余儀なくされた時がありました。仲良しチビコンビの1さんと私の二人は澤良木先生をバリケードに、ピットリくっついて進んで「おー！バラにさわらんねー」と喜んでいたら、「だから！さわらぎよー！」と、振り向いた先生の満面の笑顔。多分、一生忘れられないシーンです。懐かしいです。

澤良木先生、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

ナギへの思い

松本 孝（自然観察指導員）安芸市土居

私は2015年の夏、庭園学講座「古都の庭園と風景」受講で京都～奈良へ行き、濃い時間を過ごすことができ、日本人の美意識を日本庭園に見る思いでした。その後も受講したいと思いながらなかなか行けなくて、そんな中、このご時世、収束する日を願うばかりです。奈良での現地学習でナギを見ました。

特に春日大社で見たナギの高木では、私はナギは海岸沿いの分布とっていましたので、奈良県は海に面していないけどと、社寺とナギの関心を持って見ました。講座を終え地元へ帰り、そういえばと以前に録画していた春日大社を取り上げたNHKの番組「神が降り立った森で」を見ました。

- ・春日若宮御祭礼絵巻物のこと
- ・おん祭 1136年、長雨が続き人々を苦しめ、関白藤原忠道が始めた
- ・お旅所 若宮の旅の宿 御仮殿
- ・900年の間、一度も途絶えることなく続けていること 11月中旬に造営をはじめ
- ・かつての人々が信仰のため献木した神聖な植物ナギで御仮殿を囲う

おん祭の紹介にナギが出てきて、ぐっと見入り、ナギは献木と知りました。

安芸城跡内にある神社や初詣に行く近所の神社のほか、安芸市内の海岸沿いの神社にナギがあります。地元の小学校で風景学習のとき、児童に地元のナギを知ってほしいので私はナギを紹介しています。葉を持ってちぎりにくいことを実際に示し、国道55号のナギのこと、和歌山県新宮市の熊野速玉大社のナギの話もします。国道55号のナギは地域に伝わる昔話がある木で、それ故、国道拡幅の際、道路はナギをよけています。

ウチにナギの生垣があり、私が子どものときには既にありました。ナギの生垣は近所でも他でも見たことはなく、私はナギに親しみを持っています。

私は年に数回するナギの生垣剪定でもウチはそういう暮らしと、これからも過ごしていきます。



「ナギの木は残った」国道55号のナギ

スミレに恋してその 13 筆山～皿ヶ嶺のスミレ

細川 公子

今年、早くもスミレの季節が始まっています。1月24日の日曜日に植物研究会の下見調査で佐川町と日高村の里山を歩いてきました。日高村錦山の近くでは春を先取りして、いち早くアオイスミレが咲き始めていました。普通、ちゃんと咲いていても地味で小さく目立たない花なのに、さらに、匍匐する地上茎に沿うように花茎も立てずひっそりと。春は確実にやってきています。

さて、20年以上続けている私の担当の「スミレ観察会」は近年、皿ヶ嶺周辺で行っています。市街地から近く、人里に生育するスミレがほぼ観察できるフィールドとして気軽に楽しめると思っています。照葉樹林の筆山側では、由緒ある立派なお墓の周りに、日蔭や半日蔭を好むシハイスミレ、



シハイスミレ

フモトスミレ、コスミレ、タチツボスミレ、ニョイスミレが、日当たりの良い草原ではニオイタチツボスミレ、スミレが多く、所々で群落を形成しています。他にはヒメスミレ（車道近くの園地に多い）とノジスミレもみられます。さらに、注意してみると、フモトスミレとシハイスミレの雑種やスミレの品種で唇弁の奥まで紫のミョウジンスミレも観察できます。品種、雑種も数えると11種類のスミレが観察できるでしょう。あと、20年ほど前まで高知県ではここだけ、アギスミレの群生がみられたのに、現在は環境の悪化で全く姿を消してしまったのは実に残念です。



コスミレ

今年も春の彼岸の時期に同じ皿ヶ嶺コースで観察会を開催したいと思います。（日程は調整中です。）

「スミレに恋して」の連載は今号で13回となり、そろそろネタ切れのため連載は終了させていただきます。またの機会がありましたら単発での投稿も考えていますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。



ニオイタチツボスミレ

2020年春。中国で始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、またたくまに世界中に広がり日本にも侵入した。タンポポ調査の最中であつたが、いつも行動を共にしている調査仲間もわたしも、すでに高齢者であり、それぞれの家族には持病を抱えている者がいる。感染予防のため接触を控えたほうが良いと考え、心残りではあつたが調査を中断した。タンポポ調査は一人でもできないことはないが、感動を分かち合う仲間がいないと楽しくないししんどいだけである。たかがタンポポ、というなかれ。これはありふれた植物の分布を漫然と見ていくだけの調査ではない。その向こうには、人々の暮らし方の変化や地域の歴史、人間活動が環境に与えている負荷の大きさなど、深く重たいものが見えてくる。地球温暖化でシベリアの永久凍土が解け、長い間凍土の中に閉じ込められていたウイルスが発見されたそう。このウイルスに病原性があるのかどうかは、これからの研究で明らかにされるという。今、世界中の人々を苦しめている新型コロナウイルスの感染拡大も、便利さや物質的な豊かさを追い求め続けている私たちの欲望の結果であることは、否定できない。今まで気づかなかつた雑種タンポポの出現や、急速に増えていく外来種、貴重な在来種が瀕死の状態にあることも、この疫病の拡大とまったく無縁のことではないと思う。人類はこの地球上で、あまりにも優位にたつたばかりに、たいへんなしっぺ返しを受けているのだ。

気になる植物の観察が思うようにできない一年であつた。自分の人生の中で、あと何回開花や結実を観ることができると、弱気になってしまったが、でも、植物たちにとっては人間が踏み込んでこない静かな環境で、安心して花を咲かすことができた年であつたのかもしれない。天然酵母でパンづくりをしている人が「今年は空中の麹菌がとてもよく採れた」と言っていた。世界中で人間活動が止まり、空気がきれいになったからだそう。新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちに環境をこれ以上破壊してはいけないという、重大な警告ではないかと思う。

感染が少し落ち着いた頃、嬉しいことがあつた。これまで交流のなかつた都会からの移住者たちが、樹木の観察会をしたい、と声をかけてくれた。川沿いの小さなキャンプ場の周囲に生える樹木に名札を付けたい。樹木の名前を知れば、この場所でのキャンプがより楽しいものになるはずだ、という。喜んで参加した。特徴や利用法、名前の由来、エピソードなどを知り、最後に名札を付ける。この日は30種以上の名札が付けられた。根際から長いつるを四方八方に伸ばし、川岸の石をまるで蛇籠のように抱え込むフジ、白く雪が積もつたように花を咲かせたサザンカは、この村ではどの家でも種子から「かたし油」を採っていたこと、イスノキの虫こぶは子供たちのおもちゃの笛だったこと、などなど。どの樹木にも新鮮な驚きがあつた。

この日の参加者の中には、無農薬で米づくりを始めた人もいる。この人たちに休耕田の再生を提案した。これまで通りの米づくりをすることで、絶滅が心配されているたくさんの植物を守ることができる。学校にも働きかけて、児童生徒をまきこんだ米づくりをしよう。たった一か所になってしまったヒメノボタンの自生地であり、140年前、牧野さんが見てからずっと確認されていなかったホザキノミミカキグサの再発見ができたこの場所の未来が少し明るいものになってきた。

撮っておきの一枚

オオシロショウジョウバカマ

Heloniopsis leucantha (Koidz.) Honda



オオシロショウジョウバカマは徳之島以南、沖縄県は本島北部と石垣島・西表島に分布しています。こちらでは寒さに少し弱いので12月に縁側に取り込めば1月に花が咲きます。 山岡 重隆



針木浄水場の紅葉

高知市針木北 1 丁目にある針木浄水場の紅葉です。台湾フウ（台湾楓）など外来種が多いですが、山の紅葉が終わった11月末から12月初めにかけて楽しめます。

坂本 彰



撮っておきの一枚コーナーへの投稿をお待ちしています
栽培中の植物や野生動植物、風景写真など、会員の皆様のお気に入りの写真を短いコメントと一緒に送ってください。
送り先はパソコンの場合は s-akira@mvd.biglobe.ne.jp
スマートフォンからは sakamotosanrei@docomo.ne.jp
希少な写真だけでなく、身近で感じた自然の姿を写し撮って送ってください。

きままなカメラ日記

久川 信子

まずは、今年の抱負を！

2021 年も気ままにフィールドを駆けまわり、わんぱくな一年にしたいと思います!?
また、皆さまと一緒にしたらご指導の程よろしくをお願いします。

さて、2 回目となる今回はお気に入りの場所『みやびの丘』での写真です。この場所は、三嶺の森を守るみんなの会の依光先生に教えていただいた一つです。先生とは物部川の野鳥やアユを見ていて出会いました。以来『鳥友』です。

先生の夢はこの丘を、老いも若きも春には剣山系の山々をバックに、ミツバツツジの広がる景色を眺めながらお弁当を食べられる場所にしたいそうです。この丘を通じて山にハマった私も、先生の夢の実現を応援していきたいと思います。



※日時が逆に進行します(^_^)

令和 3 年 1 月 20 日

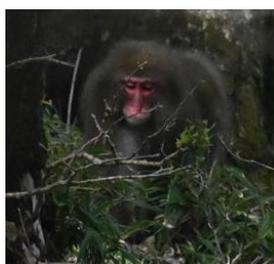
この景色、駐車場から約 20 分で山頂に着けるみやびの丘の御来光です。真正面が石立山で左手には次郎笈と剣山、さらに稜線に白髪山が見えます。写真の立ち枯れの木は、山頂のシンボルです。←勝手にそう思ってます。



令和 2 年 11 月 27 日

『夕方は黄金に光る海が見えるよ』と先生。なんと！黄金に光る海には、横浪スカイラインと桂浜が見えるじゃありませんか！

わかります？山頂であの場所が撮影できるとは感激しました。



<野鳥以外で出会った動物 in みやびの丘>

先生と歩道を外れて丘を下っていたところ威嚇する獣の音がします。どうやらサルの群れにお邪魔したらしい…ボスザルが迫ってきますが、メスと子が移動して逃げたら目も合わせず下を向いて、そっと立ち去りました。本当はボスも人間が怖かったのですね。シカの群れにあった時もオスはいつも最後まで逃げません。

最後に、フンチュウ(オオセンチコガネ)です。いわゆるフンコロガシだそうで、青やピンクとカラフルなのに驚きました♪しかし、この後、先生はその手でみかんを剥いて食べちゃいました。山男は平気だそうです…これも新発見の驚きか(笑)



それでは、今回も高知の自然を勉強中の「きままなカメラ日記」を最後までご覧いただきありがとうございました。

朝倉城址城山の植物 その1 コジキイチゴ

坂本 彰

前回投稿した古仁淀川の文章の中で少し触れたが、JR 朝倉駅南方、高知大学の西方にある城山（地元では「じょやま」と呼ばれている）は私の散歩コースの一つである。標高は 106m しかなく、山というより丘陵である。かつては本山氏が城を築き、旧春野町や土佐市を勢力範囲に置く上での拠点であつたらしい。詰ノ段周辺には横堀や竪堀、土塁、堀切があり、戦国時代の城の機能や作られ方がよくわかる。松田直則編土佐の山城によれば、本山氏が本山城に退去したのち長宗我部元親によって支配された時期もあるが、1588 年の検地段階ですでに城として機能していなかったとのことである。現在はすっかり昔の姿に戻って竹林や照葉樹林に囲まれた丘になっている。この丘に生育する植物を順次紹介していきたい。まず第 1 回はコジキイチゴである。

コジキイチゴの存在は今年の 6 月末に初めて気が付いた。私が見落としていたのか、それとも昨年になって孟宗竹が伐採され、それまでとは全く違った明るい環境になったために出現してきたのかどちらかだろう。バライチゴやクサイチゴに似ているもの、それとは異なる種で今まで見たことのない植物だった。翌日改めて出向き、写真を撮影するとともに標本を採集した。図鑑で調べた結果、バラ科キイチゴ属のコジキイチゴであった。高知県植物誌で県内の標本採集状況を確認すると、高知市では未採集であったが、東部の安田町から西部の宿毛市まで 13 市町村で採集されていた。その中に私も含めた物部調査チームが香北町で採集している標本もあった。城山で見たとき「見たことがない種」と思ったが、実は以前にも見ていたが情報としてインプットされていなかったというのが正しいようである。全国的な分布をみると本州の茨木県が北限で、本州・四国・九州に分布するとされている。さらに、日本のレッドデータ検索システムで調べると、北限の茨城県をはじめ 12 の都・県で絶滅のおそれがある植物として指定されており、全国的には稀な植物のようである。特に九州では福岡県を除く残る 6 県でレッドリストの対象になっており、長崎県では絶滅危惧Ⅰ類（CR）になっている。分布域は日本から台湾、朝鮮半島南部、中国、インドネシア、タイ、アッサム、東ヒマラヤと続くだけに、九州において絶滅危惧植物として指定されているということは、やや奇異に感じる。

正体がわかって次に気になったのはその名前である。コジキイチゴは漢字で書くと乞食苺である。「乞食」というのはこの植物の姿形からはいささか違和感を持つ名前であり、その由来が気になった。ネットで調べると甑（こしき）がなまって「こじき」になったとの説が多くみられた。甑は米などを蒸す土器であり、日本では 5 世紀ごろから 8 世紀ごろまで使われていたとのことである。今では米などを蒸す道具は蒸籠（せいろ）にとって代わられているが、楮の皮をはぐ前に楮を蒸す工程では今でも甑が使われている。確かにコジキイチゴの果実と甑は形が似ているが、HP では甑説の出所が示されていない。また、甑島は「こしきじま」で乞食島ではなく、「こしき」がなまって「こじき」になったというのは疑問も残る。

植物図鑑の中でも牧野植物図鑑には和名の語源についてよく書かれている。これは牧野博士が和名の由来を調べておられ、誤用を嫌い、正しい和名を使うことにより意を用いたためであろう。手元にある牧野新日本植物図鑑を当たってみたが和名の由来には触れていなかった。ただ、牧野図鑑では学名を *Robusu rosaefolius* Smith var. *sorifolius* Makino としており、牧野博士がコジキイチゴをナンヨウバライチゴ（現在使われている綴りは *Rubus*

rosifolius) の新変種として記載していることが分かった。新変種の記載論文を見れば、ひょっとして和名の由来につながる何かを得られるのではないと考え、牧野植物園牧野文庫の司書さんを煩わせて 1901 年に植物学雑誌に掲載された論文を入手したが、和名に関しては Nom. Jap. Koziki - ichigo だけであった。そのほか、牧野博士の著作や植物の名前に関するいくつかの本を当たってみたが、和名の由来についての確かな文献には行き当らなかった。

手元にある高知県の植物に関するいくつかの書籍を当たっていくなかで、和田豊州著四国の植物分布とその生態にコジキイチゴの方言が掲載されているのを見つけた。それによると、コジキイチゴは高知県安芸郡東川村において「サツキイチゴ」「チャブクロイチゴ」と呼ばれていた。サツキイチゴはこの植物が旧暦の 5 月に黄色の鮮やかな実をつけることから、チャブクロイチゴは袋状の果実の形に由来するものであることは、容易に推測できた。どちらの名も、コジキイチゴの特徴をよく表しており、コジキイチゴよりはるかに良い名前だと思う。話がそれるが、この方言の使われていたとされる旧安芸郡東川村は、現在の安芸市入河内や黒瀬、大井、古井、別役などの集落を含む地域で、私の生まれ育った場所である。小さいころにはナワシロイチゴやナガバイチゴ、フユイチゴなどは食べたが、コジキイチゴを食べた記憶は全くない。

今回、キイチゴ属の仲間であり、果実も結構大きいので期待を持って食べてみた。果実は大きい割には張りぼてのような恰好（チャブクロイチゴ、フクロイチゴと呼ばれることがよく分かった）で食べてもなく、味も予想に反して美味くなかった。水っぽい、これといった特徴のない味であった。



写真 コジキイチゴとその近縁種

上段：コジキイチゴ

下段左：クサイチゴ

下段右：バライチゴ



観察会のお知らせ

スミレと早春の花観察会

筆山から皿ヶ峰にかけて、林縁や草原に咲くスミレ類、春の花を観察します。

筆山周辺では林縁や林床に咲くスミレが、皿ヶ峰では明るい草原に咲くスミレが観察できます。

日時 2021年3月27日(土曜日) 午前9時から11時

場所 高知市筆山・皿ヶ峰周辺 9時に筆山第2駐車場(皿ヶ峰登り口の駐車場)に集合

講師 細川公子さん

持ってくるもの メモ用具 あれば図鑑

その他 雨天中止です

参加希望者は事前の申し込みをお願いいたします。

申込先 高知県自然観察指導員連絡会 坂本彰

TEL&FAX088-850-0102 Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp

お知らせ 総会に代えて書面議決を行います

例年2月に定例総会を開催して、前年度の活動報告、会計報告、新年度の活動計画、予算についてご意見をいただき、承認・議決という手続きを取ってきました。しかしながら今年については、新型コロナウイルス感染症拡大の状況を考慮し、集会方式を避けて、議案書を送り書面で賛否をうかがうという方法を取らせていただくこととしました。また、同時に開催しておりました研修会・講演会については時期を変更して開催したいと考えております。

後日、議案書と書面評決のハガキを送りますので、もれなく返信くださるようお願いいたします。

編集後記

無事にNo.56号を発行できました。毎度のことながら投稿いただいた皆様に感謝・感謝です。連続して書いていただいた細川さんの「スミレに恋して」が今回で終了とのお知らせを受けました。長いあいだありがとうございました。次に恋するものは何か決まっていらないようですが、新たな恋の対象が見つかりましたら、カムバックをお願いいたします。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No.56 2021年1月31日発行

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp